

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科日本文学専攻 博士課程後期課程2年	片岡 美有季 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	立教大学文学部 日本文学専修・教授	石川 巧 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	戦後文学における〈女性性欲〉の表象をめぐる諸問題		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科日本文学専攻 博士課程後期課程2年	片岡 美有季	
研究期間	2011 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

1945年～1950年前後に発表された文学作品や、カストリ雑誌などを中心に、〈女性性欲〉の表象をめぐる言説を整理し、性をめぐってなされてきた言説の内実を明らかにする作業を行ってきた。

本研究の特色は、日本が第二次世界大戦に敗戦してからの3年間に焦点化し、戦後直後の混乱期において、「小説」になる一步手前の雑誌媒体（主にカストリ雑誌）に〈女性性欲〉がどのように描かれてきたかを明らかにすることにある。そのことによって、「性の解放」が叫ばれた当時のイデオロギーを前景化させ、性にまつわる表象が言説化されていくことを明らかにしようという点で、独創性があるといえる。

研究目的は、敗戦直後の混沌とした時代のなかで、〈女性性欲〉の表象に戦後もなお「抑圧」／「解放」の図式が与えられてきた過程の具体性を抽出するだけでなく、GHQによる言論統制とはべつの、日本の警察組織による独自の検閲の可能性を明らかにすることで、これまでの研究状況を推進させていく意図がある。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[戦後文学] [〈女性性欲〉] [カストリ雑誌]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

坂口安吾は戦後、とりわけ一九四六、七年にかけて、数多くの作品を世に送り出している。この二年間の安吾の作品には、とりわけ女の肉体をテーマとしたものが多い。「白痴」(一九四六年六月、「新潮」)をはじめとし、「女体」(一九四六年九月「文芸春秋」)、「いづこへ」(一九四六年一〇月、「新小説」)、「恋をしに行く」(一九四七年一月、「新潮」)、「外套と青空」(一九四七年七月、「中央公論」)などが挙げられよう。

その後、「戦争と一人の女」(一九四六年一〇月、「新生」)では、肉体に「正規の愛情のよろこび」のない「不具な女体」が描き出され、不感症と読み得る特性を付与された女が登場する。さらに、その翌年に発表された、「私は海をだきしめていたい」(一九四七年一月「文芸」)、「花火」(一九四七年五月、「サンデー毎日」臨時増刊号)、「青鬼の禪を洗う女」(一九四七年一〇月、週刊朝日二五周年記念「愛と美」)のなかでもまた、不感症の女が描かれている。この当時の安吾の作品については、「肉体」という括りだけではなく、不感症の表象をひとつの軸として作品を解することが可能である。

これまで、「戦争と一人の女」、「私は海をだきしめていたい」、「青鬼の禪を洗う女」の三作品は、不感症が描かれた作品群として、安吾の重要なテーマの一つである「孤独」と結び付けられてきた。本研究では、こうした先行研究を踏まえ、「孤独」という読解コードではなく、不感症の表象を仔細に分析することで、安吾のいう「人間の正体」に迫っていきたい。これまで言及されることのなかった「花火」に登場する「私」の肉体に焦点化し、考察を進めていく。それによって、一連の作品群における不感症の女の表象が複雑化していく一過程を示すとともに、安吾における「肉体」諸問題に接続させることを目指すものである。

- 1) 不感症の表象と「孤独」
- 2) 坂口安吾による「肉体」言説
- 3) 〈女性性欲〉の表象がみられる作品
- 4) 「花火」における不感症の女
- 5) エクスタシー表象と「肉体自体の思考」

まず、不感症という表象が「孤独」に結び付けられて考えられてきたこと(1))、安吾自身が「肉体」に関してどのような言及をしていたかを確認する(2))。また、これまで不感症というキーワードで括られてきた作品群の枠組みをいったん取り外したうえで、不感症に関連する問題として、〈女性性欲〉の表象がみられる作品分析を試みる(3))。本研究では、これまで看過されてきた「花火」という作品に焦点化することによって、不感症の表象の転換点を明らかにする(4))。作品に描出されるエクスタシー表象が、安吾の「肉体自体の思考」(「肉体自体が思考する」一九四六年一月一八日、「読売新聞」)にどのように作用していったかを確認する(5))。

一九四六年から四七年にかけて、安吾は執拗なほどに不感症の女を描いた。「花火」における試みが、「肉体自体の思考」の実践の契機となったことを明らかにすることを目的とする。

先述したように、坂口安吾は戦後、数多くの作品を世に送り出している。奥野健男は当時の安吾について、「昭和二十一年から、昭和二十二年にかけての坂口安吾の筆は、のびのびと闊達で、アドルム、ヒロポンのせいもあり回転がはやくスピードがあり、どの作品も気力充実してたのしい」と評価をしている。さらに、そのうえで、「「花妖」の連載中断があるにせよ、この昭和二十一年から二年にかけて坂口安吾は梶三千代と結婚し、無頼派のいや戦後文学の先頭にたつ文学者として活躍し、実りある多くの問題作、力作、そして傑作を書き続けた」と絶賛している。

この二年間の安吾の作品には、とりわけ女の肉体をテーマとしたものが多数存在する。本研究では、これまでの先行研究では看過されてきた「花火」という作品に焦点化して考察していく。

「花火」にも見受けられるように、この時期の安吾の作品には、「肉体のよろこび」のない女性が幾人も登場する。こうした女性の描写や表象は、これまでどのように読まれてきたのだろうか。「花火」についての単独の先行論文が存在しないため、周辺作品に関する先行研究を簡単に確認していく。

和田博文「私は海をだきしめてみたい」・坂口安吾——欲望について——(一九九一年一月、「国文学 解釈と教材の研究」)では、「関係することで逆に「私」は、孤独に直面する」という指摘、林淑美「〈モラル〉と呼ぶ新しい概念の創造——「白痴」と安吾の戦後」(二〇〇二年九月、坂口安吾研究会編「坂口安吾論集Ⅰ 越境する安吾」ゆまに書房)では、「孤独とは対他的な自己意識の相」といった指摘がみられる。天野知幸「〈肉体の思考が撃つもの〉——「戦争と一人の女」(二〇〇七年一〇月、坂口安吾研究会編「坂口安吾論集Ⅲ 新世紀への安吾」ゆまに書房)では林論を受けて「他者との交流の一瞬を「私」はあえて手放していた」ことや、「肉体的な交渉の場面でも同じで、野村が「不感症」と見なしていた「女」の態度は、他者との精神的な繋がり拒絶があることが論じられている。これまでの研究では概して、作品内に「不感症」と読みうる表現が存在し、それらが「孤独」を描き出すに有用であることが指摘されてきた。

研究成果の概要 つづき

しかし、一概に「不感症」と括ってしまうことには些かの疑問が残る。「孤独」というテーマだけでなく、不感症の表象の仔細な分析を試みることによって、安吾の描く肉体が何を語るのか、その可能性を探っていきたいと思う。

「肉欲、欲情」の「暴露」を「厭うべき理由はない」と断ずる安吾の態度が「欲望について——プレヴォとラクロー——」(一九四六年九月、「人間 鎌倉文庫刊)から窺える。また、こうした姿勢は、「阿部定という女(浅田一博士へ)」(一九四八年一月、「Gメン)において「男女の肉体生活の合理性」が「もっと公開的に論議せられることが望ましいと思う」という言説にもあらわれているといえる。「貞操の幅と限界」(一九四七年五月一・二日、「時事新報)が示しているように、「貞操」は「一人の男のため」のものではなく、「自分の純潔のもの」であるとする安吾の独特の貞操観念にも通じている。「肉体自体が思考する」(一九四六年一月一八日、「読売新聞)では、「人間の正体というもの、モラルというものを肉体自体の思考から探し出さねばならぬ」という問題意識が明らかにされており、「タブーというものを合理的に、なしくずしに減らして行く」「理性的な発掘と建設作業」が安吾によって実践されたといえる。その実践は、作品にどのように反映されているのだろうか。一九四六年から四七年にかけて、肉体諸問題をテーマとして描かれた作品を分析していくことで、安吾の実践がどのように試みられていたかを分析した。

「女体」(一九四六年九月、「文芸春秋)という作品では、「夜の遊び」に「全身的で、没我的」である素子という女性が描出される。彼女は「谷村」によって「思考する肉体」、「肉体なき何者かの思考」と語られ、「つきせぬ魅力」と「つきせぬ憎しみ」を感じさせる女性として存在している。しかしながら、作品は、谷村の「熱烈な恋」への思いで閉じられる。「肉体というものがない、ただ精神があるだけの、そしてあらゆる火よりも強烈な、燃え狂い、燃え絶ゆるような激しい恋を。その恋とともに掻き消えてしまいたい、と谷村は思った」。「女体」という作品はこの一文で終わる。こうした谷村の姿は、のちに発表される「恋をしに行く」という作品へと受け継がれていくこととなる。「いずこへ」(一九四六年一〇月、「新小説)という作品では、「肉欲の快樂だけを生き甲斐」にしている「アキ」という女性は「男の生殖器の好奇心のみで生きている」姿として否定的に描かれる。そのことは、肉体に「魅力がない」と語られることでも明らかである。また、否定的に描かれる「アキ」と象徴的な女性として、「真実の娼婦」の像が挙げられている。「真実の娼婦」は「自分の陶醉を犠牲にしているに相違ない」と語られる。多くの先行論でも指摘されているように、安吾にとっての娼婦の理想像はマノン・レスコーである。こうしたところにも、その理想の一端は垣間見えている。

これまで「不感症」と読める肉体の描写は、「正規の愛情のよろこび」がないというように語られてきたが、「私は海をだきしめていたい」(一九四七年一月、「文芸)という作品では、はじめて「不感症」と明言される。不感症が「肉体の感動というもの」がないといった表現で言い換えられている。また「戦争と一人の女」(一九四六年一〇月、「新生)にも見られたように、女が「遊女屋」にいたこと、娼婦であったことが不感症の原因とされる傾向がここにも窺うことができる。そのような特性を持つ女に対し、「ただ肉体が好きなのだ」という「私」の姿が描かれることによって、不感症の肉体は印象づけられる。

「花火」は、「肉体のよろこび」を感じたことがないという女の表象が、「私」という女性一人称で描かれる。女性一人称による語りは「続戦争と一人の女」(一九四六年十一月、「サロン)に続き、二度目の試みである。ただし、「続戦争と一人の女」から受け継がれているものは、「肉体のよろこび」を感じないという女体のモチーフのみであるといえる。「花火」では、「肉体のよろこび」を感じない「私」は、自身を「不健全な女」と捉えている。また、美男子に対しては、「腰のあたりがふるえるような気」になったり、「息苦しく」なったり、「からだギンむような気持」になるなど「興奮」を覚えていることもわかる。これらは、「続戦争と一人の女」の「私」にはみられなかった表象である。

「花火」における「私」は、当初、「私の理知」で自らの「快感」を語り、その「理知」のために「快感」を得られない存在として描かれてきた。また、他者からの眼差しによって、自らの肉体を規定してきた。しかしながら、「全身的な酔い」が「私の理知」を無力にすると、「すべてが、分からなくなった」という一文からも看取できるように、「私」は感情を言語化できぬ状態として描かれる。それはまさに、「私」が求めるエクスタシーであると同時に、安吾における「肉体自体の思考」の問題に連結している。その問題とは、「精神の思考を離れて、肉体自体が何を語るか」というものであった。「精神の思考」を離れて「肉体自体」で思考したとき、そこには「快感」を得ることの描写ではなく、「快感」そのものを描いて見せるという試みがあったのではないだろうか。「花火」は、「肉体自体の思考」を実践したのものとして、再考されるべき作品だといえる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

- ・片岡美有季「**「武蔵野夫人」論 (上)**」立教大学日本文学、第106号、2011年7月
 - ・片岡美有季「**「武蔵野夫人」論 (下)**」立教大学日本文学、第108号、2012年7月
- ※採録予定

② 図書

なし

③ シンポジウム・公開講演会等

なし

④ その他

「坂口安吾「花火」論——〈肉体のよろこび〉を得る過程——」立教大学日本文学会、
於：立教大学、2011年7月2日 (口頭発表)